

## 6 研究開発の仮説に対する効果と評価

<p>(仮説1) 「グローバル探究プログラム」により、高い志をもった、将来のグローバルリーダーを育成するとともに、将来のキャリアパスを描くことができる。</p>
<p>＜指定期間中に達成すべき具体的な目標＞</p> <p>①グローバル人材を育成し国際競争力を高めることを掲げている「スーパーグローバル大学」、「世界大学ランキング上位を目指す大学」等への進学者を増加させる。</p> <p>②高校在学中に留学を経験する者、海外の大学への進学を考える者、大学在学中に留学を経験する者を増加させる。</p>
<p>＜今年度の効果および評価＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1年地域課題研究、2年異文化研究、3年キャリアパス探求を行う「グローバル探求プログラム」が実践され、課題研究等を利用したAO推薦入試合格者の数が増加した。国公立大学を例にとると、SGH指定の初年度及び次年度は、AO推薦入試の合格者は2年連続で6名であったが、SGHを3年間経験した初めての卒業生が出た昨年は、16名となり、さらに<u>今年は24名のAO推薦入試合格者となった</u>。タイプA 11名、タイプB 7名の合計18名となり、タイプAでは、北大、東北大、筑波大、名古屋大、大阪大、九州大、早稲田大、名古屋大、筑波大、早稲田大と数は少ないものの難関SGUに合格した。高校で実践した課題研究をAO推薦入試に利用し、さらに、3年次にキャリア計画として「シンカ宣言」を作成し、自分のキャリアパスを描くことができた。</li> <li>・自主的に留学又は海外研修に行く生徒数が大幅に増加した。これまで、今年度中の自主的な海外留学者は、H28:54名→H29:58名→H30:54名→R1:143名となった。これは、2年生が台湾グローバル研修において、高雄女子高級中學校で英語での交流をし、その中で課題研究に関してプレゼンテーションを行い留学や海外研修について、自信を深めたことが大きな要因の一つである。また、ラグビー部は気候行動(Climate Action)を実践し、昨年のCOP24(気候変動枠組条約第24回締約国会議)に1名が参加したのに続き、国連大学で行われた「開発と平和のためのスポーツの国際デー」に参加し、2名がプレゼンを行った。さらに、アメリカへの1年留学が1名、「トビタテ!留学JAPAN」に2名が合格し短期留学している。</li> </ul>
<p>(仮説2) 生徒全員が課題研究に取り組み、高大連携や高高連携、関係機関との連携などを効果的に取り入れることにより、生徒は自らの殻を破り、チャレンジ精神を身につけるとともに、課題研究の質を飛躍的に高めることができる。</p>
<p>＜指定期間中に達成すべき具体的な目標＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英語ディベート大会・模擬国連・各種の国内外の大会(会議)など、グローバルな社会課題を発見・解決する資質向上に役立つ大会、会議、研究会等への参加を促し、さらに校内で実施する課題研究を国内外の発表会等で発表する生徒数を増加させる。</li> </ul>
<p>＜今年度の効果および評価＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高大連携により課題研究の質を高めた。普段の教員の指導に加え、宇都宮大学の教員をアドバイザーとして中間発表を行ったり、同大学の留学生による留学生指導を実施することで課題研究の質を高めることができた。さらに、1年生と2年生は、課題研究のため公的機関や企業にフィールドワークに行くなど生徒全員が関係機関を利用している。また、SGHクラブ・海外研究班は「全国高校生フォーラム」、「栃木高校SSH成果発表会」で研究発表するなど、発表するたびに研究や発表の質を高めていった。日本地理学会の「春季学術大会」にも参加予定であったが残念なことに大会自体が中止となった。</li> <li>・英語ディベートにおいて、多くの大会に参加し、良好な成績を収めた。SGHクラブ・ディベート班は今年度も多くの大会に参加し、多くの帰国生も含む全国の強豪校相手に五角以上の戦いをした。本校は帰国生はほぼ皆無の状況で生徒達は本校のプログ</li> </ul>

<p>ラムによるトレーニングで英語による即興ディベートに挑戦している。毎年全国大会で上位を占める栃木県にあって上位をキープし、PDA高校生高校生即興英語ディベート合宿・大会2019課外授業（初心者）の部において、全国優勝を果たすなど、良好な結果を残している。</p>
<p>（仮説3）すべての教科でのアクティブラーニング型授業の導入や教科のSGH化、学校設定教科CTP（Critical Thinking Program）の実践、英語によるコミュニケーション能力の向上、評価方法の研究開発等を進めることで、本校のグローバル教育全体が『シンカ（進化、深化、真価、Thinker）』する。</p>
<p>＜指定期間中に達成すべき具体的な目標＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アクティブラーニングやフィールドワークを通常の授業で実施したり、教科間の協働授業の機会を創出したりすることで、主体的に学ぶ生徒を増加させる。</li> <li>・生徒の授業評価や保護者の学校評価で、授業やグローバル教育への満足度を向上させる。</li> <li>・全ての生徒の英語によるコミュニケーション能力の向上を目指し、卒業時においてCEFRのB1～B2レベルの英語力を有する生徒を増加させる。</li> </ul>
<p>＜今年度の効果および評価＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本校の学校設定科目CTP(クリティカルシンキングプログラム)では、「5教科連携型アクティブラーニング」を通して生徒の「クリシンカ(批判的・論理的思考力)」の養成を行った。今年度も1学期に、国数理地・公の4教科による「クリシン基礎」を行い、2学期からは「クリシン応用」として日本語ディベートを行った。更に3学期には、国理地・公の3教科に関連するテーマを選び、英語ディベートを高校1年生全員が行った。また、ディベートごとに振り返りを記述し、論題に対する考えを深化させた。クリシン力の増強に関しては<u>帝京大学若山准教授のクリシンテストの結果でも科学的に証明されている</u>。</li> <li>・英語の授業や学校設定科目CTPで、ディベート活動を取り入れるなど、英語でのコミュニケーション能力が向上した。CEFRのB1～B2レベルの英語力については、高3生でB1が4名、B2が63名となり、<u>ここ4年間で最高の割合44%となった(H28:15%→H29:35%→H30:26%→R1:44%)</u>。</li> </ul>

<p>（仮説4）近隣の小学校や中学校、県内の高校、大学、関係団体等と連携し、グローバル教育を推進する拠点として、本県のグローバル教育を牽引する。</p>
<p>＜指定期間中に達成すべき具体的な目標＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本校の公開授業・研究授業や成果発表会等に参加する近隣の小学校、中学校、県内の高校、大学からの参加者を増加させ、授業や課題研究等に対する評価を高める。</li> </ul>
<p>＜今年度の効果および評価＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・公開授業等多くの来校者を迎え、評価を高めた。今年度は2回の授業公開、SGH成果発表会および「海外グローバル研修」課題研究コンテスト、SGH特別講演会等を開催し、<u>6/22の授業公開だけでも1,000名を越える参加者があった</u>。課題研究に関する県内の高校からの注目度も高く、成果発表会やコンテストに教員と生徒からの申し込みが多い。成果発表会では一つの高校から20名もの生徒が見学に訪れた。このように参加者に本校の研究状況、指導法を示すことで、本県のグローバル教育を牽引する大きな役割を担うことができた。</li> <li>・4年間ディベート拠点校として、県内の多くの高校にディベートを浸透させた。本県は英語ディベート活動で全国的に知られているが、県南地区ではあまり盛んでなかったこともあり、SGH初年度から本校が主催して、講習会および大会を開催してきた。その結果、ディベートの県大会に参加し上位に入賞する県南地区の高校も増加する等<u>推進拠点校の役割を昨年度に続きよく果たした</u>。</li> <li>・東京農工大学・佐野小学校・佐野市等と連携し、出前授業を行った。出前授業そのものは2回であるが、佐野小学校に計3回訪問し、小学生の発表の支援等を行った。</li> </ul>